



## 建学の精神

「人は何のために生きるのか」という人間の根本課題を考えることを教育の中心に、その答えを聖書に求めることを基本にしています。

内村鑑三はその著書『後世への最大遺物』の中で、「人の嫌がる所に行って、人の嫌がることをなせ」とのメリー・ライオンの言葉を引用していますが、私たちも「他に仕えることを使命とする人間となれ」「地の塩となれ」と生徒に呼びかけ、このことを実現させるためにさまざまな目標を掲げています。

### 教育目標

豊かな知性と確固たる良心をあわせ備えた責任の主体たる独立人を育成することを目標に、少人数・全寮制の環境において、聖書に基づく全人教育を行なう。

## 学校法人 キリスト教愛真高等学校

〒695-0002 鳥根県江津市浅利町1826-1

TEL : 0855-52-5795 FAX : 0855-52-5212



## 創立

独立伝道者 高橋三郎は、福音の種を播くためには福音を受け入れる土壌を準備することが肝要であると考え、信仰による教育を模索し始めました。1985年(昭和60)、高橋は聖書に基づく人間教育を実践する高等学校の設立を神からの使命と覚え、東京の高橋聖書集会と山陰合同聖書集会とがその母体となって祈りを合わせ準備に入りました。

高等学校設立認可のために、高橋聖書集会の絹川正吉、熊川忠などが当時の文部省、大蔵省との交渉にあたりました。地元では多田昌一が、竹浪重雄、三宅登、金澤幸雄ら山陰合同聖書集会のメンバーを率いて、鳥根県との折衝を重ねます。山陰合同聖書集会は、高橋から聖書を学んでいた人たちが集まって定期的に聖書の学びと祈りを共にする集団で、高等学校をつくろうという高橋の提案を全面的に受け入れ、創立準備にあたったのです。

当初鳥根県当局は、1学年28名という生徒定員の少なさに驚き、開校後、数年にして廃校になるのではないかと危惧し、県職員を姉妹校である基督教独立学園高等学校に視察に派遣しました。しかし歴史と実績を積み重ねている学園の様子を見て、設立認可へと大きく動いたのです。また多田は校地を取得するために、江津市と土地所有者の江津市農業協同組合との交渉も始めました。

設立には資金が必要です。高橋は信仰に基づく高校の必要性を訴え、12名の発起人とともに設立募金を呼び掛けました。国内はもとより韓国、台湾、アメリカなどからも多くの支援者があり、祈りと献金によって建設予定費用1億5000万円が与えられました。最終的に倍の費用を要しましたが、祈りつつ募金費用を捻出した支援者は、その後(キリスト教愛真高校維持会)という組織に発展し、学校の財政を今も支え続けています。

また、高橋の呼び掛けに応じて、渡辺晴季校長はじめ創立の精神をよく理解した教職員12名が参集しました。教職員は協力者と共に八王子で合宿し、教育研修会を何度も開き、教育内容の具体的検討に入りました。

こうして1988年(昭和63)4月15日開校式、そして4月18日第1回入学式を開き、第一期生28名が入学して全寮制の新しい教育は始まりました。

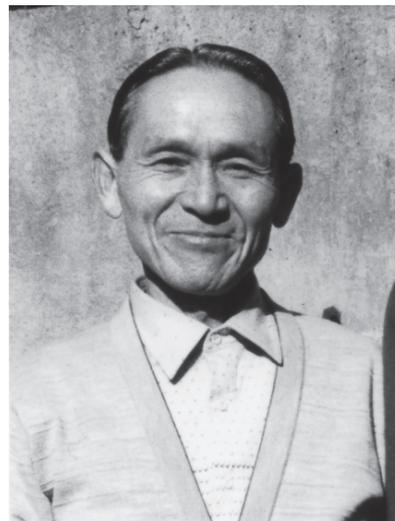
## 創立の背景と歴史

「読むべきものは聖書、学ぶべきものは天然、なすべきことは労働」。これは内村の言葉であり、キリスト教愛真高等学校に学ぶ生徒にとって具体的な生き方を示しています。生活を共にしながら、切磋琢磨に努め、卒業生のほとんどは大学や、専門学校等に進学しています。

1988年(昭和63)創設されたキリスト教愛真高等学校は、1学年1クラス定員28人、全校生徒80人ほどの日本で一番小さい全日制普通科高校かもしれません。創立責任者である高橋三郎は、仏教の家庭に育ちますが、第二次大戦中の旧制一高時代に、「人は何のために生きるのか」について答えを求めて悩み苦しみ、内村鑑三の弟子で一高教授である三谷隆正のもとを訪ねます。三谷は直接その答えを教えるのではなく、聖書を学ぶことを教えます。高橋は戦後東京大学第二工学部に在籍中、のちに東京大学総長になる矢内原忠雄の聖書集会に出席し、信仰生活に入りました。大学院を修了後、一時教職に就きますが、東京大学教養学部のドイツ科に再入学。大学院では西洋古典学を修め、ドイツのマインツ大学に留学して新約聖書について研究します。帰国後は、内村の弟子である黒崎幸吉が設立した無教会系の学生寮(登戸学寮)の寮長となり、1961年(昭和36)独立伝道者として公開の高橋聖書集会を開き、さらに1965年(昭和40)月刊伝道誌『十字架の言』を創刊しました。1994年(平成6)高橋は交通事故で頸髄損傷の重度障害を負い、体の自由を失って車椅子の生活を余儀なくされますが、高橋聖書集会の『週報』を通して口述筆記による真理の言葉を語り続け、2010年(平成22)6月24日天に召されました。

学校が設立された鳥根県江津市に在住していた多田昌一は、開校時には78歳でしたが、市道から学校への進入路、学校予定地の開墾・校舎建築を陣頭指揮しました。また学校法人と財団法人双方の理事長を務めるなど、キリスト教愛真高等学校になくはならない存在でした。多田は、鳥根県那賀郡都治村後地(現・江津市)に生まれ、中学卒業後、朝鮮(当時)の平壤で建築請負をしている父のもとで働いている間にキリスト教を知り、洗礼を受けて帰国。1933年(昭和8)関西学院大学の聴講生のとき黒崎幸吉と出会い、無教会の指導者たちの雑誌を読み始めました。酪農を生業とし、(愛真牛乳)を販売するとともに、自宅近くで戦災孤児のための施設(愛真園)を創設し、伝道に励んでいました。山陰合同聖書集会の会員でしたが、高橋の高校建設の呼び掛けに応じて立ち上がり、自宅に「キリスト教愛真高等学校設立事務所」を置きました。

初代校長の渡辺晴季は、政池仁の主宰する東京・荻窪の政池聖書集会に参加して聖書を学んでいました。当時、渡辺は、東京・青梅市内の中学校校長を務めており、「荒れる中学」の時代を経験していましたが、問題行動を起こす生徒と心を開いた対話を続け、学校に平和を取り戻していました。渡辺は「教育で一番重要なのは、生徒自らが悟れるようにすること。内村はキリスト教と真理とどちらを取るかと問われれば『真理を取る』とさえ言いました。真理の中にキリスト教があると思います」と語り、愛真教育の先頭に立ちました。愛真とは、まさに「聖書にある真理を愛する心を育てる」という意味なのです。



創立責任者 高橋三郎(1920～2010年)  
「人間は何のために生きるのか」という  
人生の根本問題を問う教育を望みました。